

# 経営と健康

第2回

## 嘉義農林甲子園の活躍

講談師 一龍斎貞花

親日の台湾が、懐日（日本統治時代を懐かしむ）のきつかけになった、映画「KANO」日台に新しい観光名所が生まれ、ことに嘉義市では観光・まちおこしに大きく寄与。掘り起しの大切さです。

日本人、漢民族、原住民との合同チーム、近藤兵太郎監督は特徴を活かせば必ず勝ると猛練習、選手の心を甲子園へと向かわせていった。

昭和六年、漢民族出身エース呉明捷。高砂族出身東とのバッテリー呼吸もよく、前年涙をのんだ台北一中に雪辱。その後も勝ち進み決勝戦に進出。鬼監督近藤は、試合中腕組みし時々指示を与えるものの、選手を信頼してか、ジツと戦況を見つめるばかり。強敵台北商業に延長の末勝利を収め、嘉

義農林は、コウシエンの合い言葉を見事実現。負けて泣くな、勝って喜びの涙に頬を濡らす選手たち。近藤監督の目にも光るものがありました。三民族の心を一つにし、弱小チームを見事結実させたリーダーシップ。

近藤監督は、嘉義を春一回、夏四回甲子園に出場させ、日本に引き揚げ後新田高校、愛媛大学で監督を務め、「野球の虫になれば、上級生は下級生の捨て石となれ」と精神を鍛え、練習は厳しかったが体罰はありませんでした。

一昨年、郷里松山に、「球は霊なり」の文字を刻んだ顕彰碑が建立された。投手で四番の明捷は、早稲田大学に進み、六大学年間七本塁打を記録し、立教長嶋さんの八本が出るまで、約二十年間六大学の記録でした。二番センターの蘇正生は、現在の神

奈川大学をへて、戦後も台湾野球発展に貢献し、台湾野球の国宝と呼ばれ、映画が出来たのも蘇さんが健在で当時のことをよく記憶していたお陰。映画の中で学生帽を被った小柄な少年は、のちに巨人・阪神で大活躍した呉昌征、強肩快足人間機関車と呼ばれ、168

cm・64kgの小柄ながら首位打者二回、盗塁王、最高殊勲選手に輝き、野球の殿堂入り。有力選手が育ち、郭源治、大豊泰昭、郭泰源、陽岱鋼などに受け継がれています。

第十七回全国中等学校野球大会。昭和六年八月十五日、嘉義農林甲子園第一戦。五万の大観衆、甲子園球場の広さに驚くばかり。嘉義の乾いた白い土と違う、黒い土に戸惑う選手たち。これを見るや近藤は土を一掴みするや、自分の白いシャツになすりつけ、

「土は土だ、台湾の土と変わらんど」「台湾の新興チーム、しかも三民族混成チーム、野球にならんだろう」と、誰もが思っています。

初戦の相手は、強豪ひしめく神奈川を勝ち抜いてきた神奈川商工。

一回の表、平野左飛、二番蘇四球で出塁するやすぐさま盗塁に成功、上松の三塁ゴロで蘇飛び出し二・三塁間に挟まれたが、前への気持ちで三塁に飛び込むや三塁手落球しセーフ。一塁に生きた上松二塁へ走る。三塁手が二塁へ投げるを見るや蘇本塁へ走るも返球されアウト。されば上松三塁へ走る。捕手あわてて三塁へ投げた球がそれた。しめたと本塁を狙ったが、カバーした遊撃手からの返球に間一髪アウト！ 隙あらば前の塁へと走る。0点に終わったものの神奈川の選手も、

観客もこの果敢な攻撃に、「オツ、なかなかやるぞ」。明捷は五回をはじめて安打を打たれたものの無得点。八回の表、先頭の東四球、真山のバントが投手のグラブをはじいて内野安打。小里の三塁ゴロで一死三塁二塁。川原バット一閃、二塁手の頭上を越え二者勇躍生還、待望の先制点、九回にも1点。3-0と嘉義リードにざわめく観衆。九回最後の打者を投手ライナーに打ち取りわずか1安打8三振を奪う好投で完封。見事初陣を飾ったのでございまして。(かつてラジオでプロ野球実況放送をした貞花の実況ぶり生でお聴き下さい)

第二戦、札幌商業に20安打7四球8盗塁の猛攻で19-7と快勝。俊足は群を抜き、出塁は得点につながると躊躇なく次の塁を狙う。凡ゴロを安打となし、単打を長打とし、スピードは正に驚嘆に値するものがありました。第三戦優勝候補の小倉工業に10-2と快勝。判官はんがんびいきもあいまって、「嘉義、嘉義」の声援は銀傘ぎんさんをゆるがせ、はるか台湾から初出場の無名の嘉義農林は、正に破竹の勢いで優勝戦へと駒を

進めた。大作家の菊池寛は、

「三民族が同じ目的のため協同し、努力しておることが涙ぐましい。僕は嘉義びいきだ」と書くなど、満天下のファンを興奮のるつぽに叩き込んだのでございました。

#### 強豪中京商業との優勝戦

いよいよ明日は優勝戦という前夜、「選手はさぞ興奮して眠られないのではなからうか。夏とはいえ布団をはいで、風邪を引かなければいいが」

近藤は、選手たちの部屋のふすまをそつと開けた。寝付かれない選手もおりました。ふすまが開いたので眠ったふりを。近藤は、はいでる布団を掛け終ると、改めて選手を見回し

「俺を甲子園に連れてきてくれて有難う」小声でつぶやくと静かに閉めた。寝たふりをしていた選手は、近くだったのでその言葉を聴くや思わず「監督ッ」

昭和六年八月二十一日午後二分、東海代表中京商業対台湾代表嘉義農林。真紅の優勝旗は果たして海を渡るか。

中京のエース吉田正男は、その後昭和八年、明石との準決勝に中田投手と

無得点のまま二十五回投げ合い、サヨナラ勝ちを収めるなど甲子園三連覇。

呉は二回3安打1四球を与え2点奪われ、更に三回の裏、明捷のズボンに点々と赤い血が、右手中指を負傷していた。血をぬぐう度に血に染まるユニフォーム、指の怪我ばかりか、予選から総て完投し八戦目、流石の豪腕も疲れていた。球は走らない、抑えが利かず球は上ずる。「タイム、タイム」ナインが気付いてマウンドに集まった。

「指を見せろ、駄目だ、監督！」

「見せろ」「嫌です」「見せろ、いかん代われ」「お願いします、投げさせて下さい」「監督、明捷のお陰でここまで来たんです。投げさせてやって下さい」「分った」

簡単な手当てをして再びマウンドへ。抑えが利かず連続四球、内野手が、「俺のところへ打たせる、必ず捕るから」予選で多くの失策をしたが、練習の甲斐あって三試合で失策五。

再びふき出す血、マウンドの土を傷口へなすりつけ止血めとし、吉岡への

第一球、意識して低目を狙った投球が大きくバウンド。二者生還し4-0と

リードされてしまった。必死で食い下がるも豪腕吉田の前に、善戦空しく敗れ去った嘉義。「よくやった、よくやった」ニコニコしながら選手を出迎える近藤監督。負けて泣くなの教えの通り、選手たちの顔に晴れやかな笑顔が広がっていました。大観衆は総立ちとなり、嘉義農林に大きな拍手を送り、健闘を称えたのでございました。

戦いを終え嘉義へ帰還、「万歳、万歳！」涙を流して出迎えた六万の市民。台湾野球の基礎を築いた近藤兵太郎。日本を訪れる台湾の人達、甲子園球場を訪れ、併設の甲子園歴史館が人気となり、映画で使用されたユニフォームのレプリカや、明捷投手の銅像が展示され、我等の英雄と見入っています。嘉義市の中心地に新たなシンボルとして麒麟児と称された呉投手の銅像が建てられ名所となり、懐日ブルムの基となりました。近藤監督と嘉義農林の若者たち。これも日台友好の絆と申せましょう。嘉義農林甲子園活躍の一席。■